

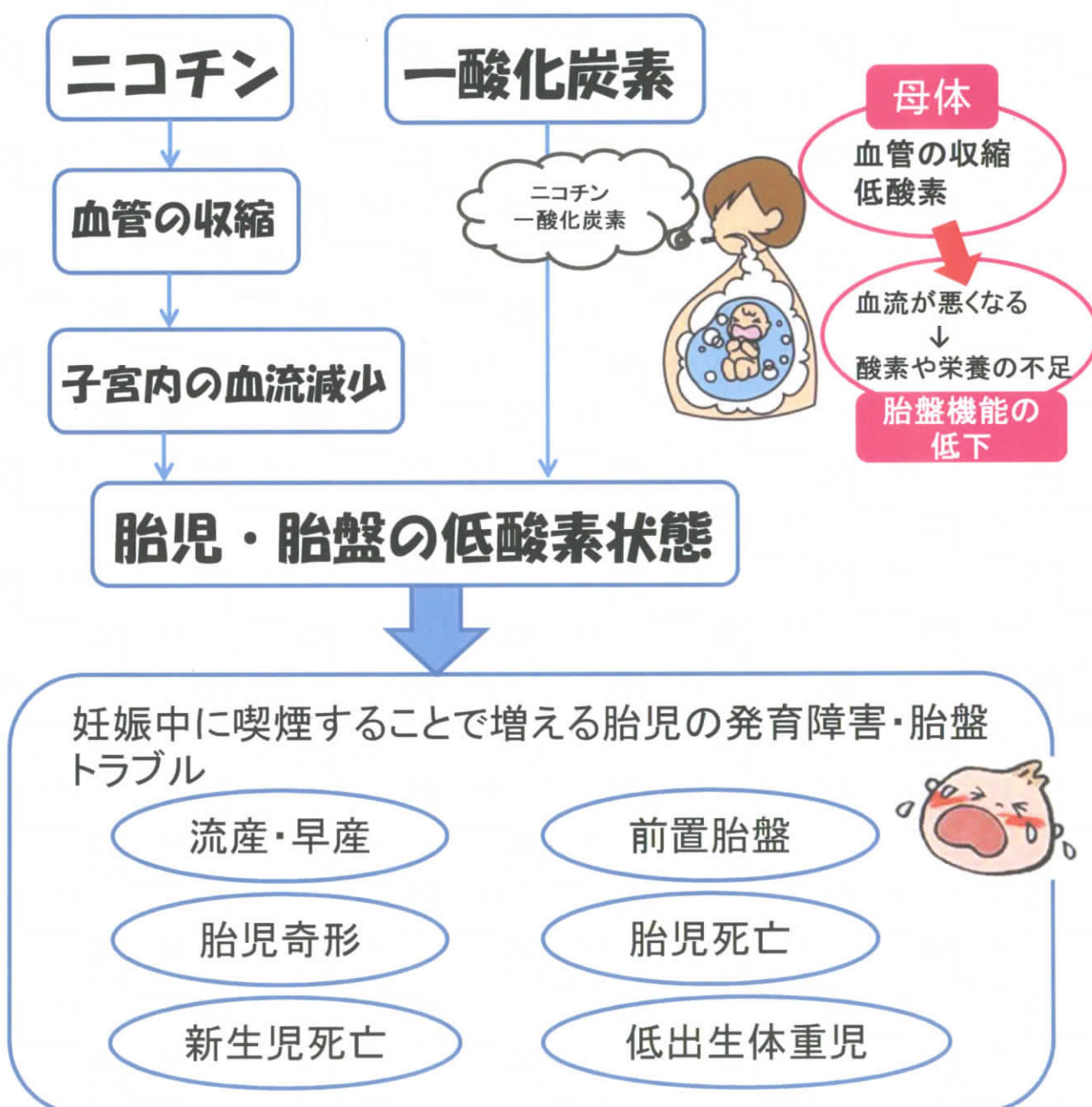
## （１）喫煙が及ぼす健康被害について

### I．妊婦の喫煙が胎児や子どもに及ぼす健康被害について

# 妊婦の喫煙による おなかの赤ちゃんへの影響

ニコチンは、胎盤への血流量を減らすため、胎児に運ばれる酸素や栄養を少なくします。

一酸化炭素は、酸素をおしのけて血液中の酸素を運ぶ役割のヘモグロビンと結合するため、胎児の酸素が不足します。



# 妊娠中の喫煙による 胎児・子どもへの影響

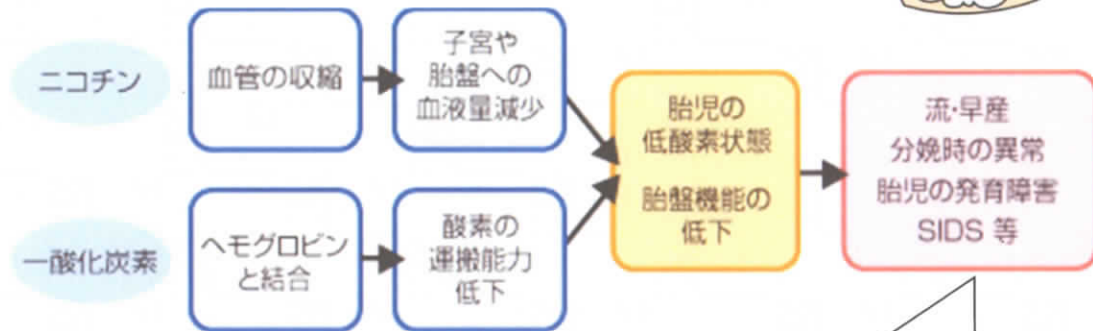


(注) ★は妊婦本人が喫煙しなくても周囲の喫煙だけでもリスクが上昇することが明らかにされている。

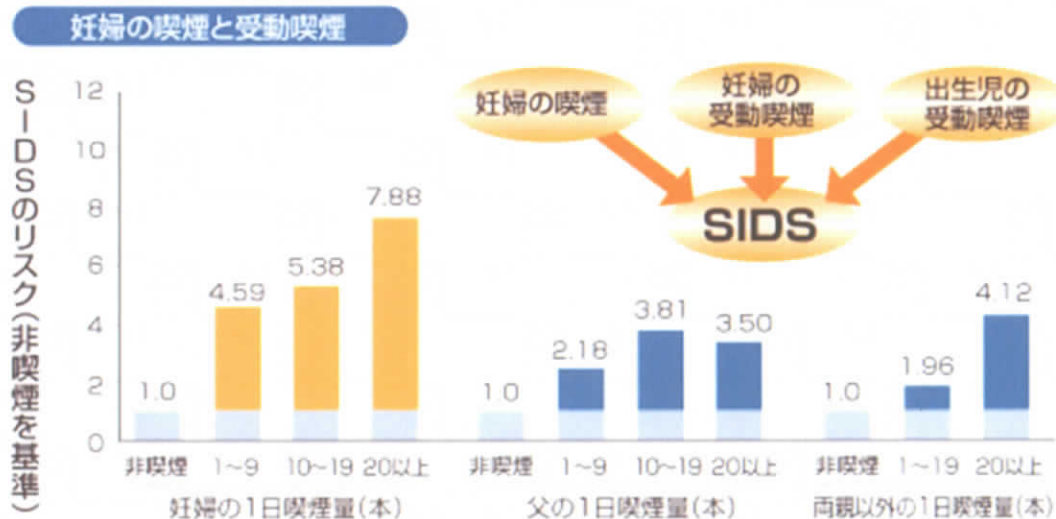
妊婦が喫煙すると、低体重児(2,500g未満)の出産、早産、妊娠中の異常(破水、胎盤早期はく離、前置胎盤など)、乳幼児突然死症候群(SIDS)のリスクが確実に高くなります。そのほか、自然流産、子宮外妊娠、児の口蓋裂(先天異常の1つ)との関係も示唆されています。

(アメリカ公衆衛生長官報告書,2004及び2006)

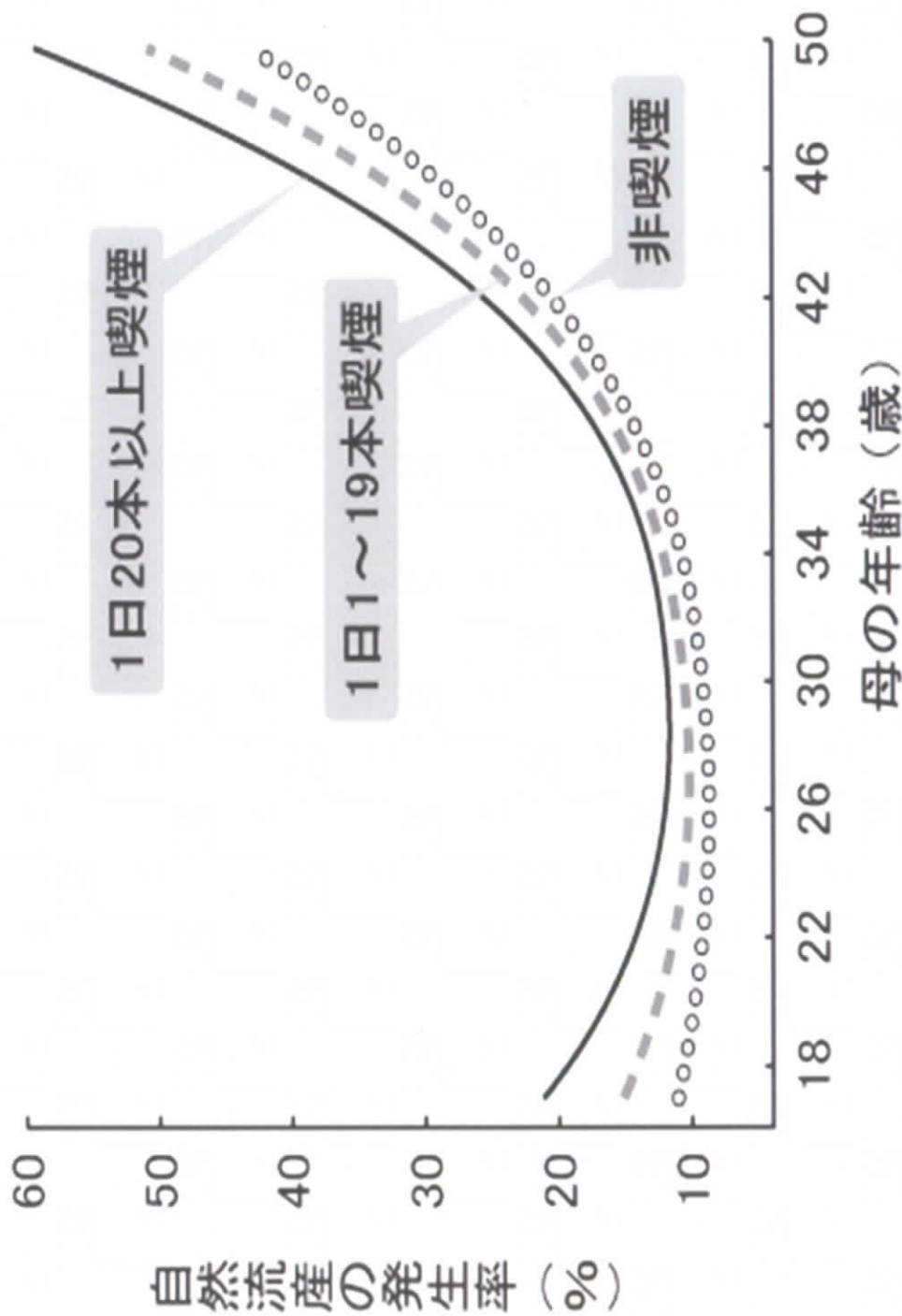
# 妊娠中の喫煙の影響



非喫煙者を1.0とした妊婦の喫煙と受動喫煙による乳幼児突然死症候群(SIDS)のリスク



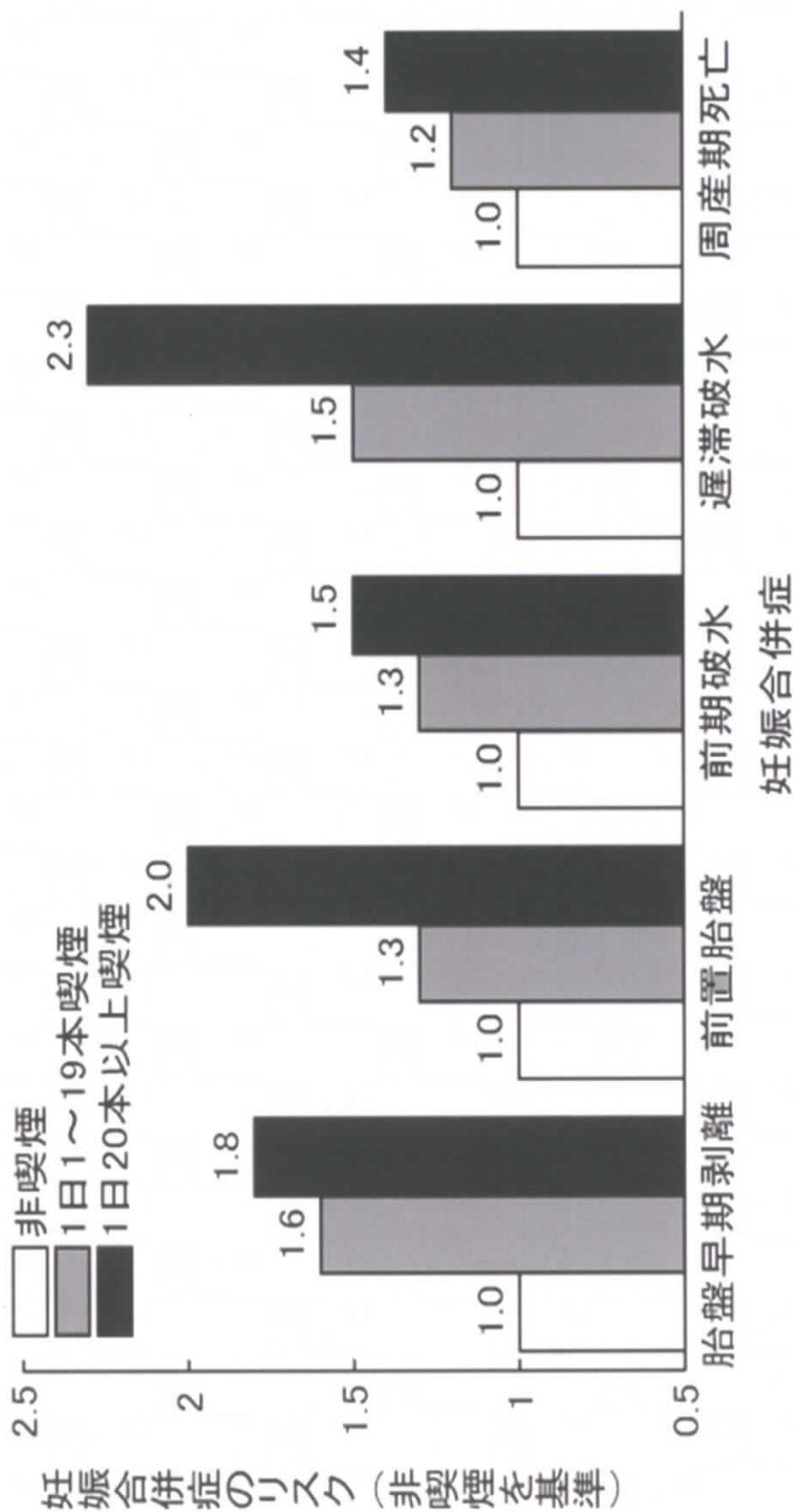
妊婦が喫煙すると流産の危険性が  
高くなります。



妊婦の喫煙と自然流産発生率 (Himmelberger, 1978)

タバコ病辞典図表コレクションより引用

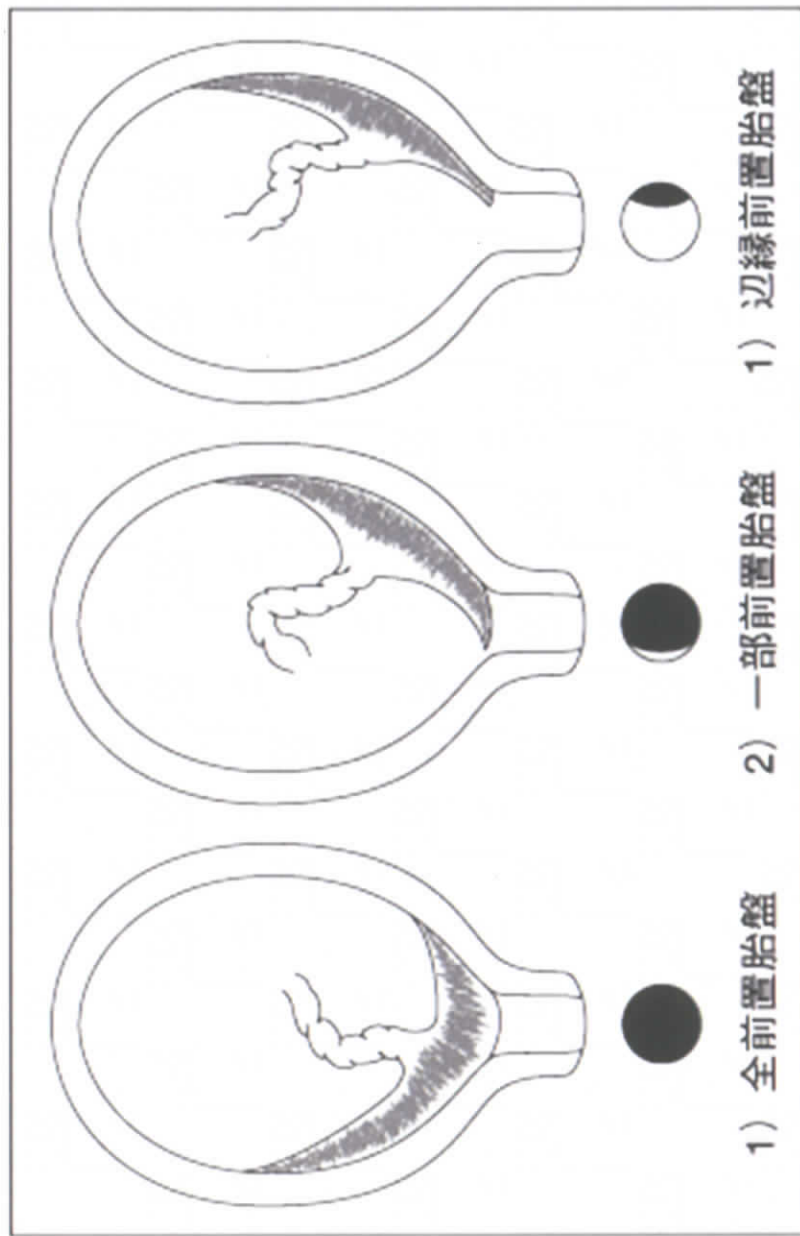
# 妊婦が喫煙すると合併症や周産期死亡が増加します。



妊婦の喫煙と妊娠合併症および周産期死亡（Meyer, 1977; 厚生省, 1988）

タバコ病辞典図表コレクションより引用

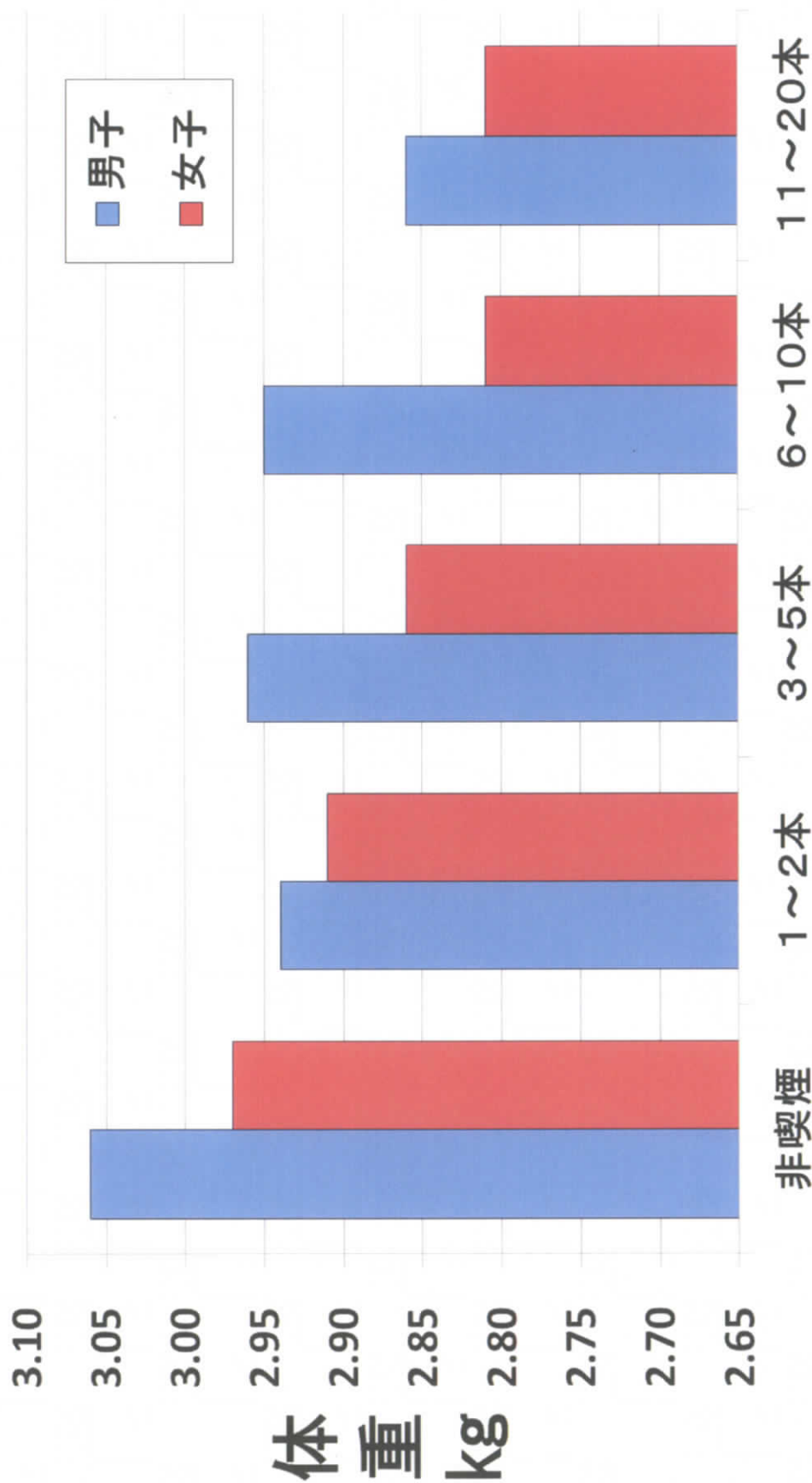
妊婦が喫煙すると胎盤にも影響(前置胎盤になりやすい)を及ぼします。



受精卵に十分な栄養や酸素が与えられないために、下方に着床したり、胎盤が下方に向けて発育するため起こると考えられています。



妊婦が1日1本でもたばこを吸うと  
出生児の体重は少なくなります。

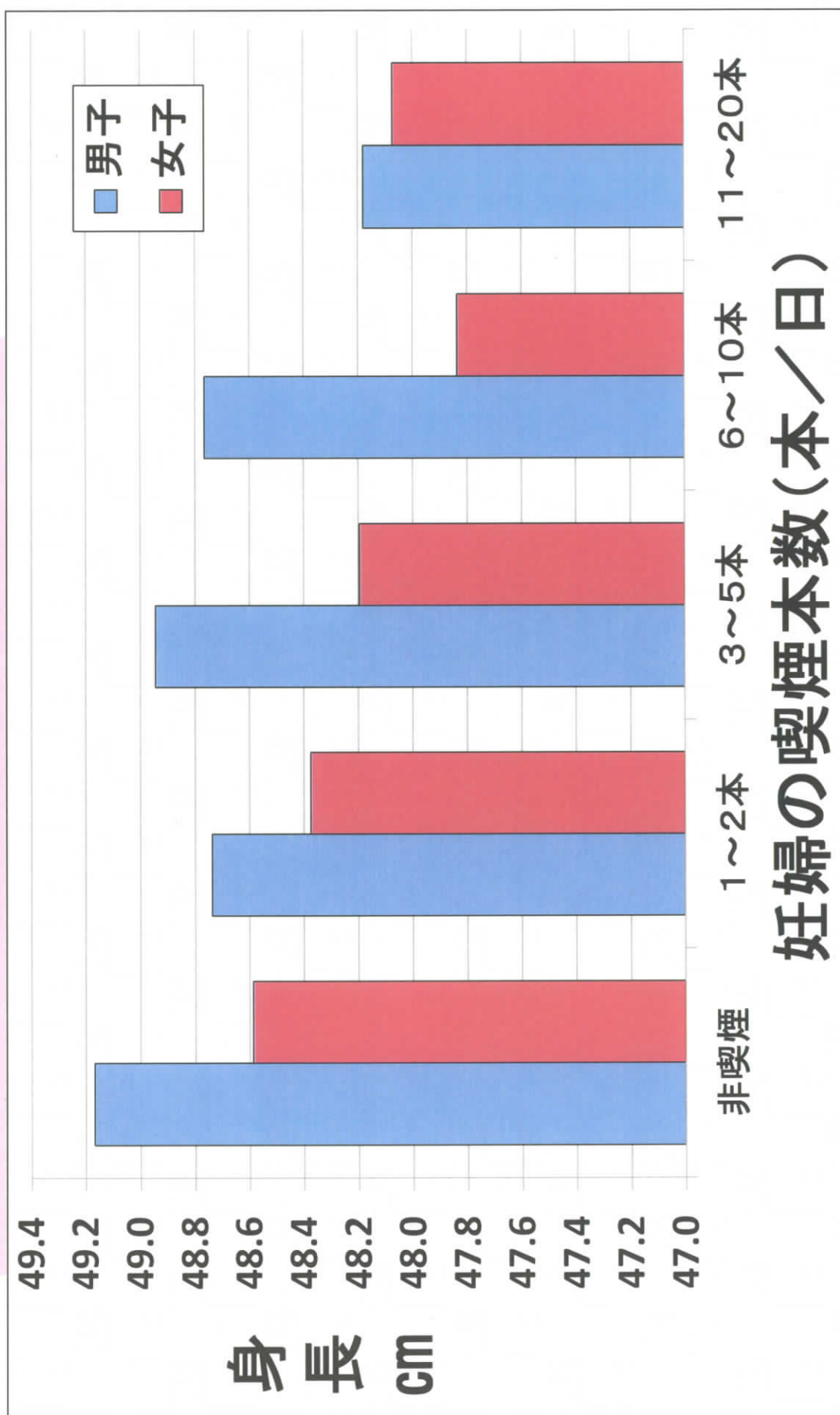


妊婦の喫煙本数(本/日)

平成22年 乳幼児身体発育調査報告書より



妊婦が1日1本でもたばこを吸うと  
出生児の身長は低くなります。

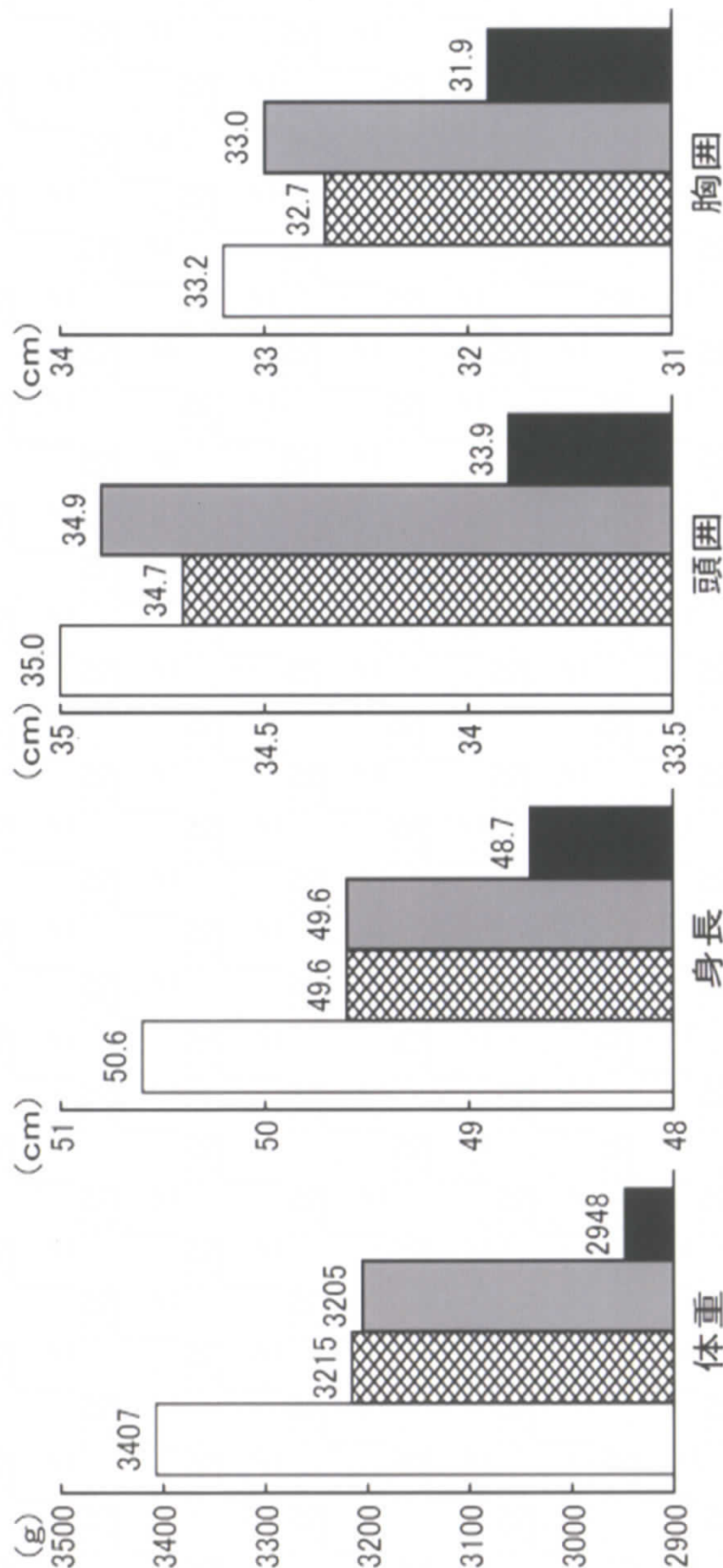


平成22年 乳幼児身体発育調査報告書より

# 妊婦の喫煙・受動喫煙により、胎児の成長が阻害されます。



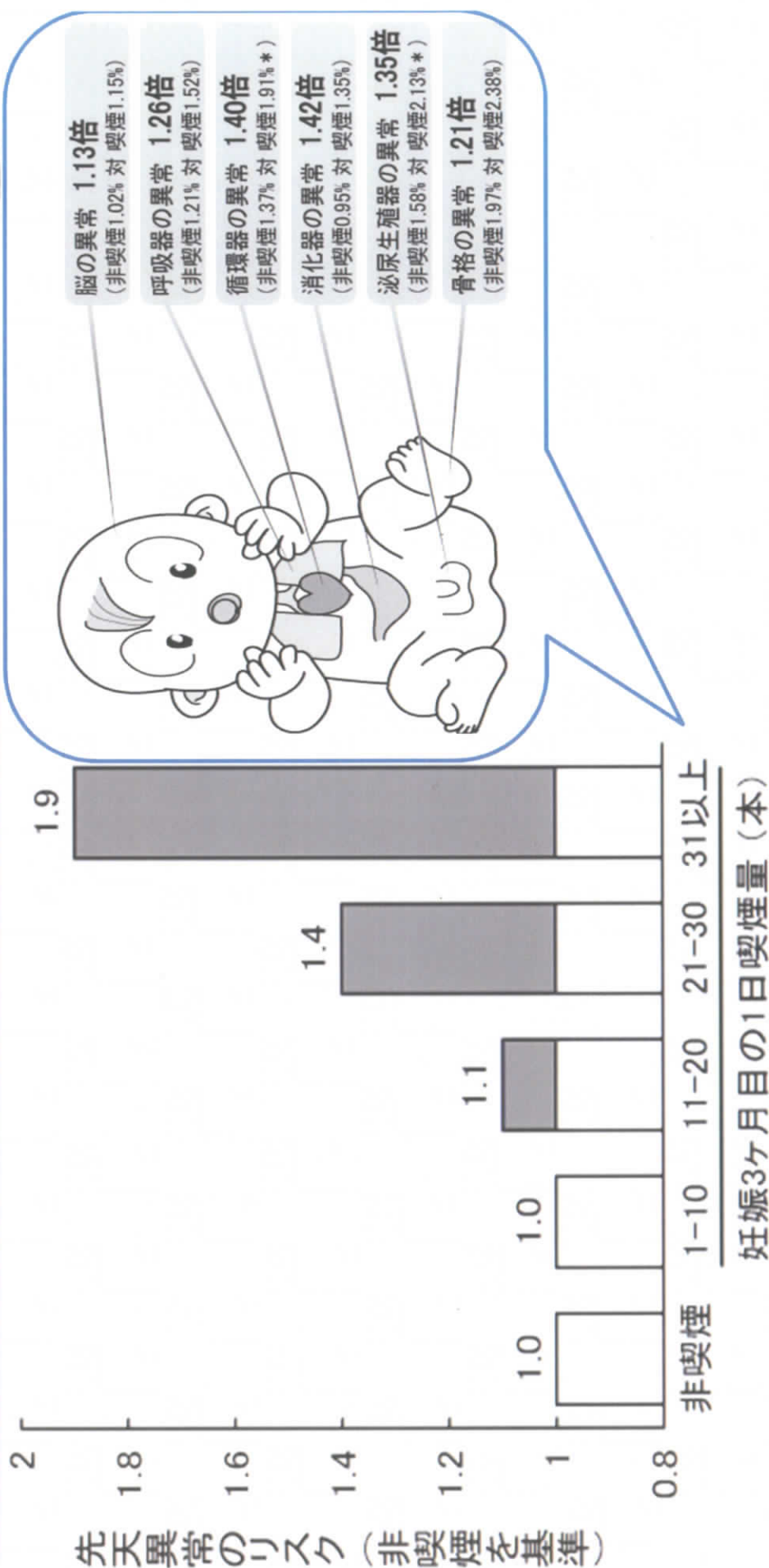
非喫煙
  受動喫煙
  1日1～9本喫煙
  1日10本以上喫煙



妊婦の喫煙、受動喫煙と出生児の身体測定値 (Roquer, 1995)

タバコ病辞典図表コレクションより引用

# 妊婦が喫煙すると出生児の先天異常が増加します。

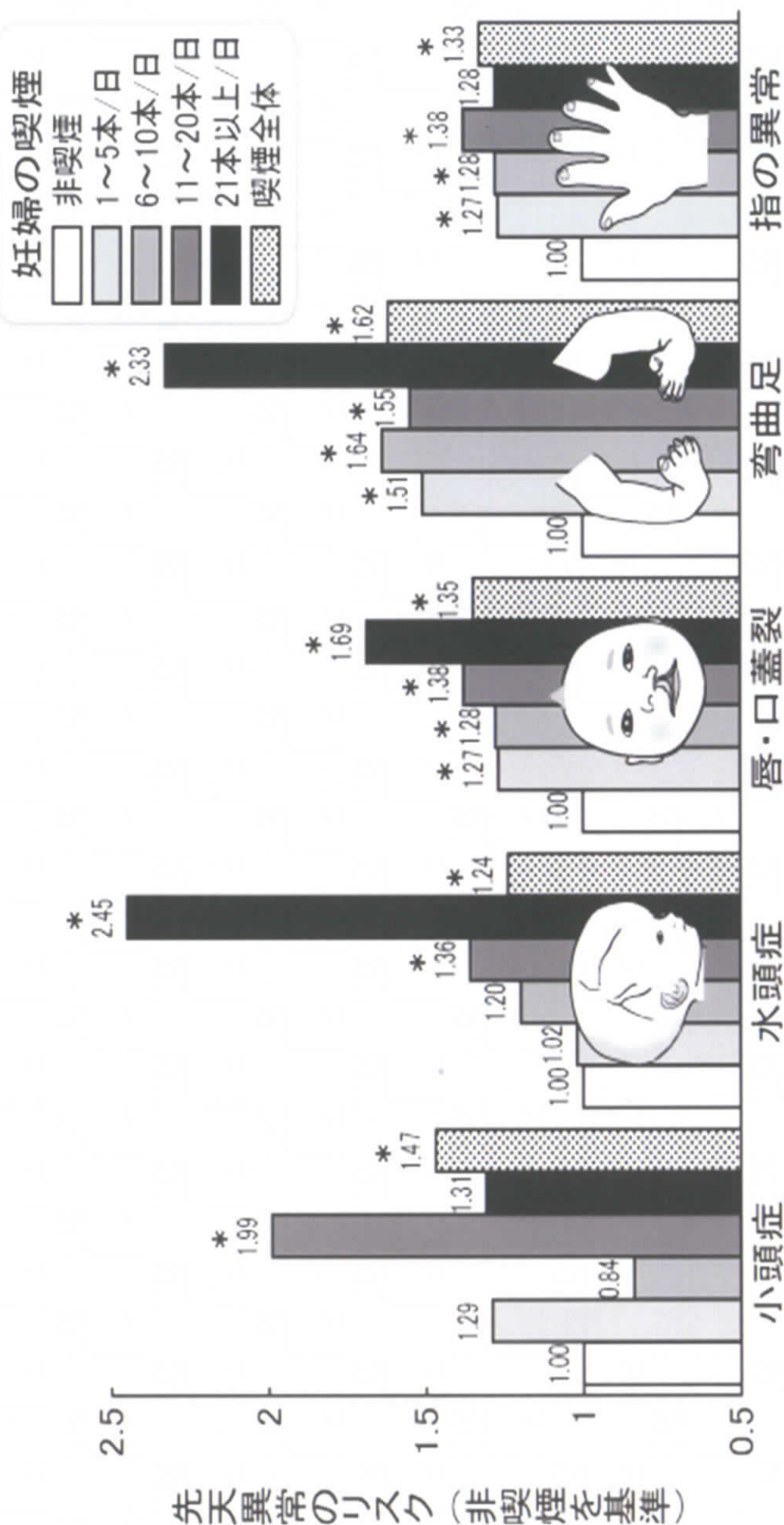


妊婦の喫煙と出生児の先天異常

(Kelsey, 1978)

タバコ病辞典図表コレクションより引用

# 妊婦が喫煙すると先天異常が増加します。



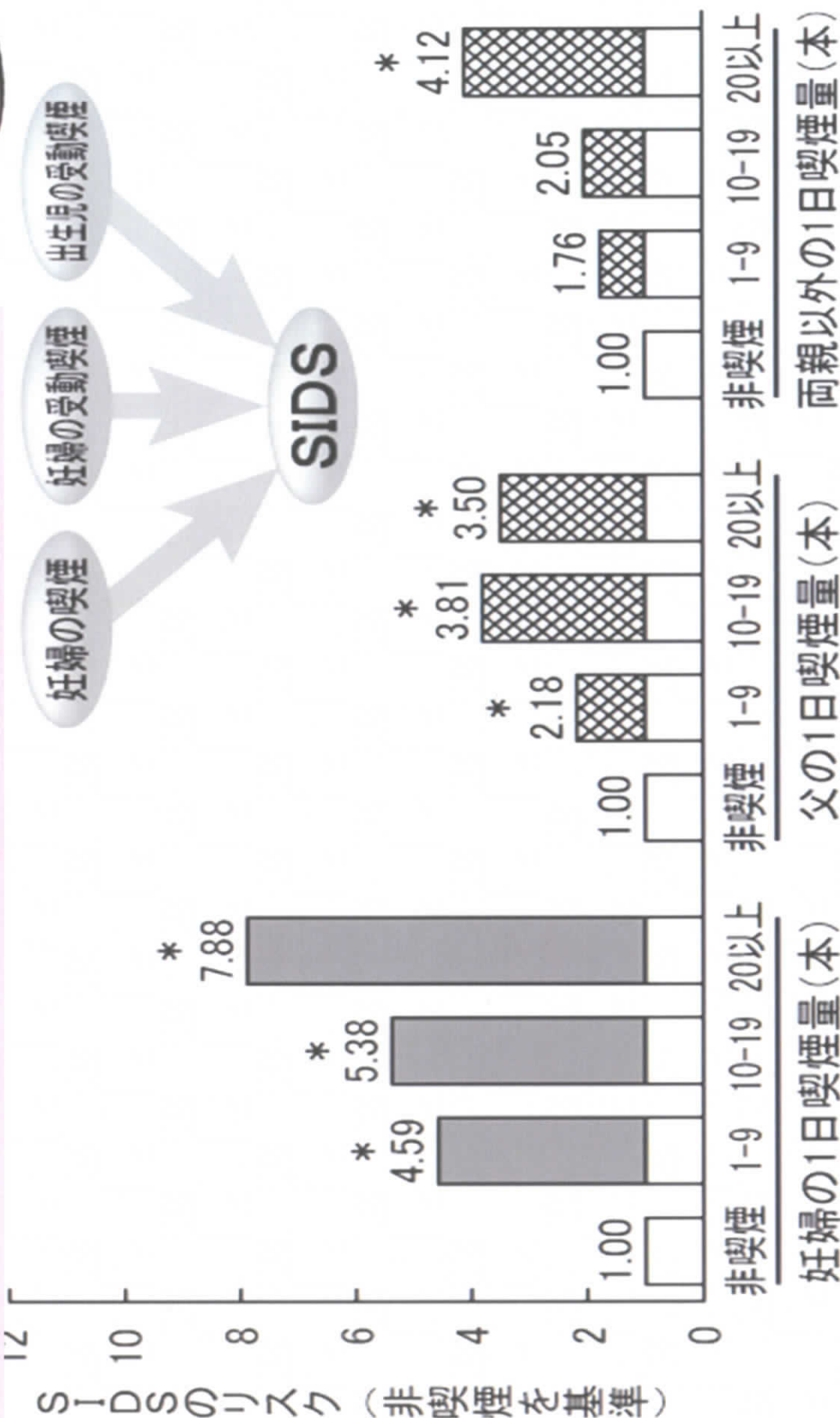
妊婦の喫煙と出生児の先天異常

(Honein, 2001)

(\*は有意差あり)

タバコ病辞典図表コレクションより引用

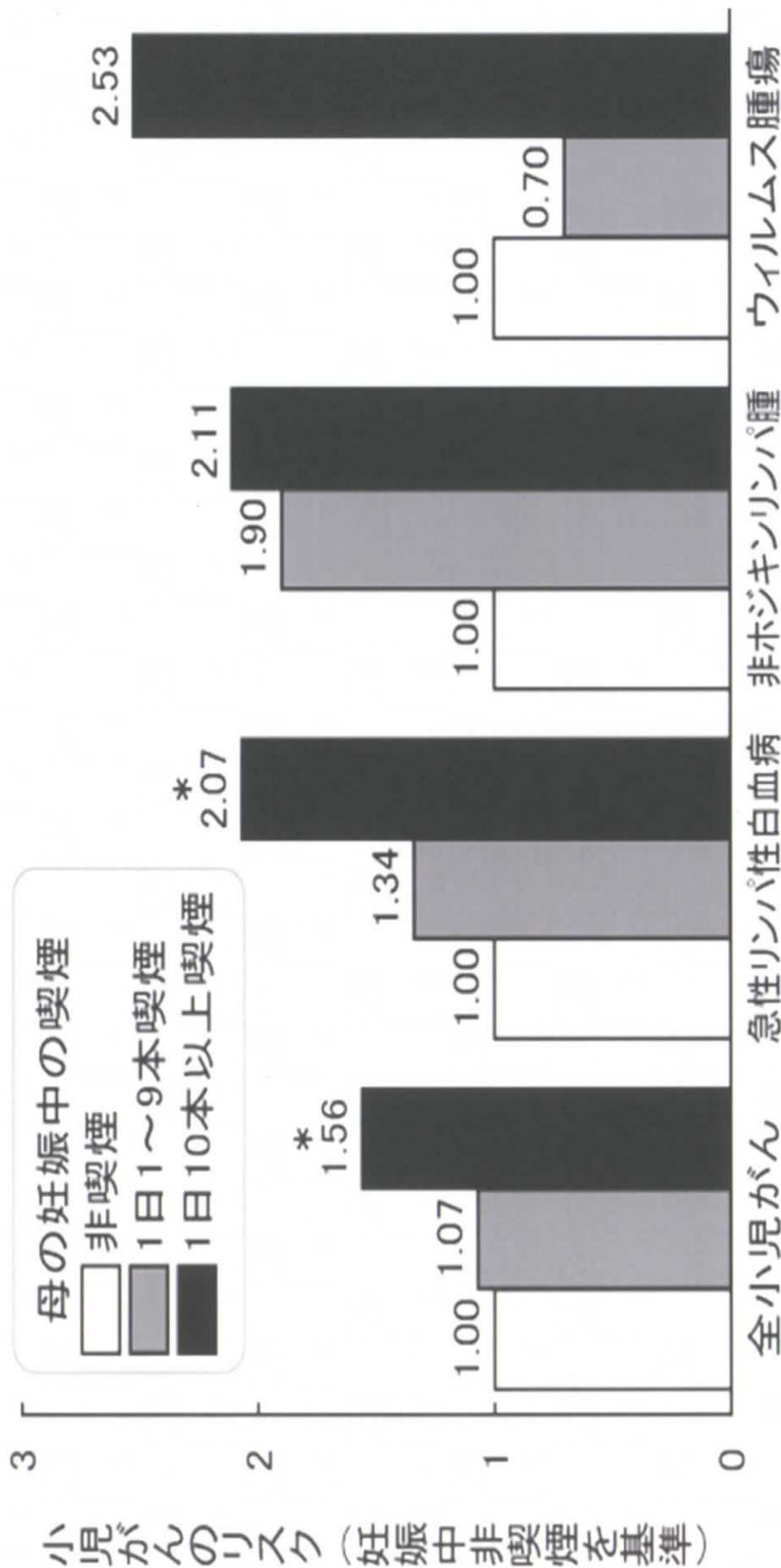
# 妊婦の喫煙・受動喫煙で乳幼児突然死症候群(SIDS)のリスクが高くなります。



( \* は有意差あり )

タバコ病辞典図表コレクションより引用

# 妊婦が喫煙すると、子どもの小児がんのリスクが高くなります。

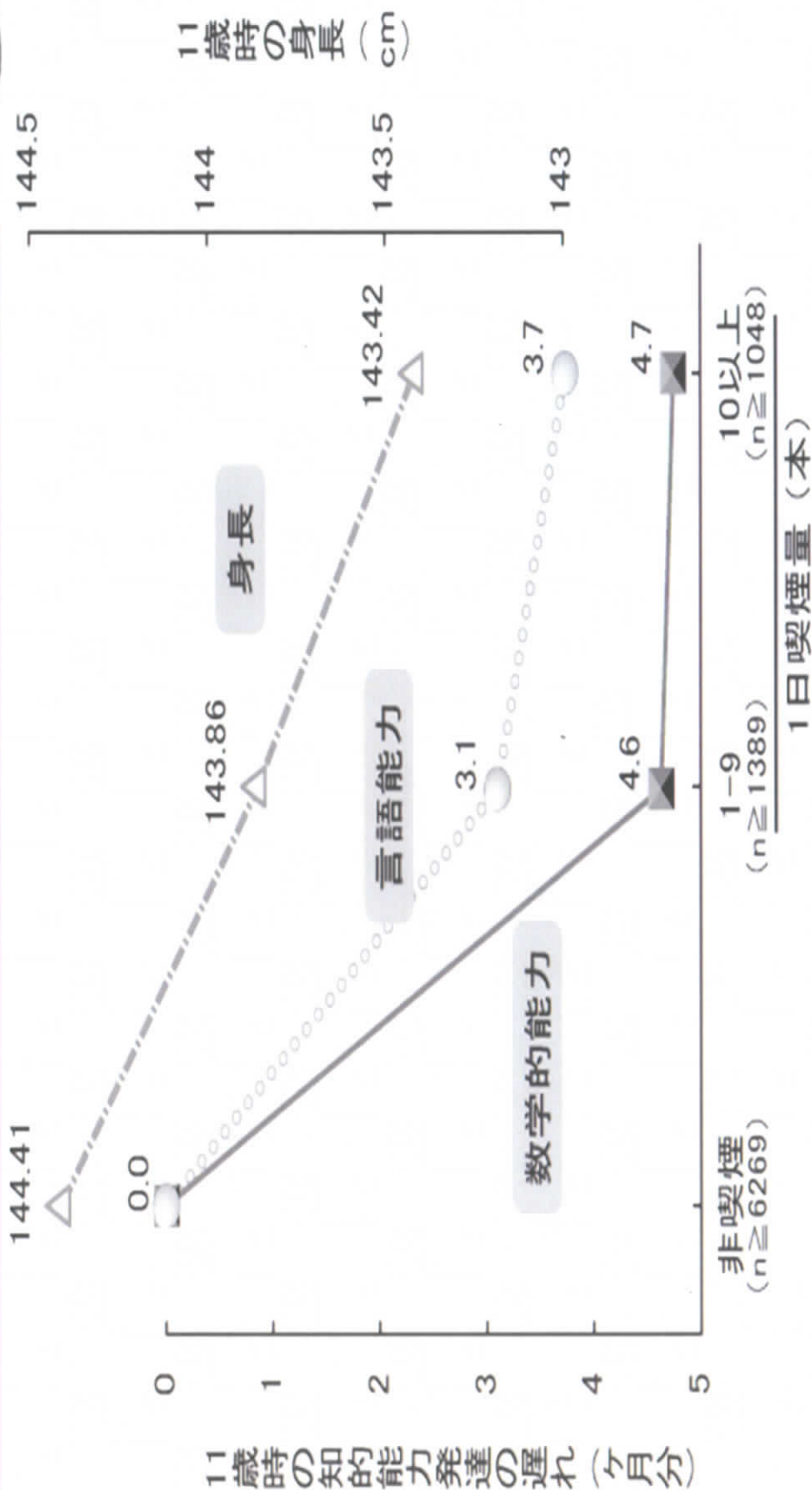


妊婦の喫煙と小児がん (Stjernfeldt, 1986)

(\*は有意差あり)

タバコ病辞典図表コレクションより引用

妊婦が喫煙すると、子どもが大きくなったときの知的能力や身長に影響します。



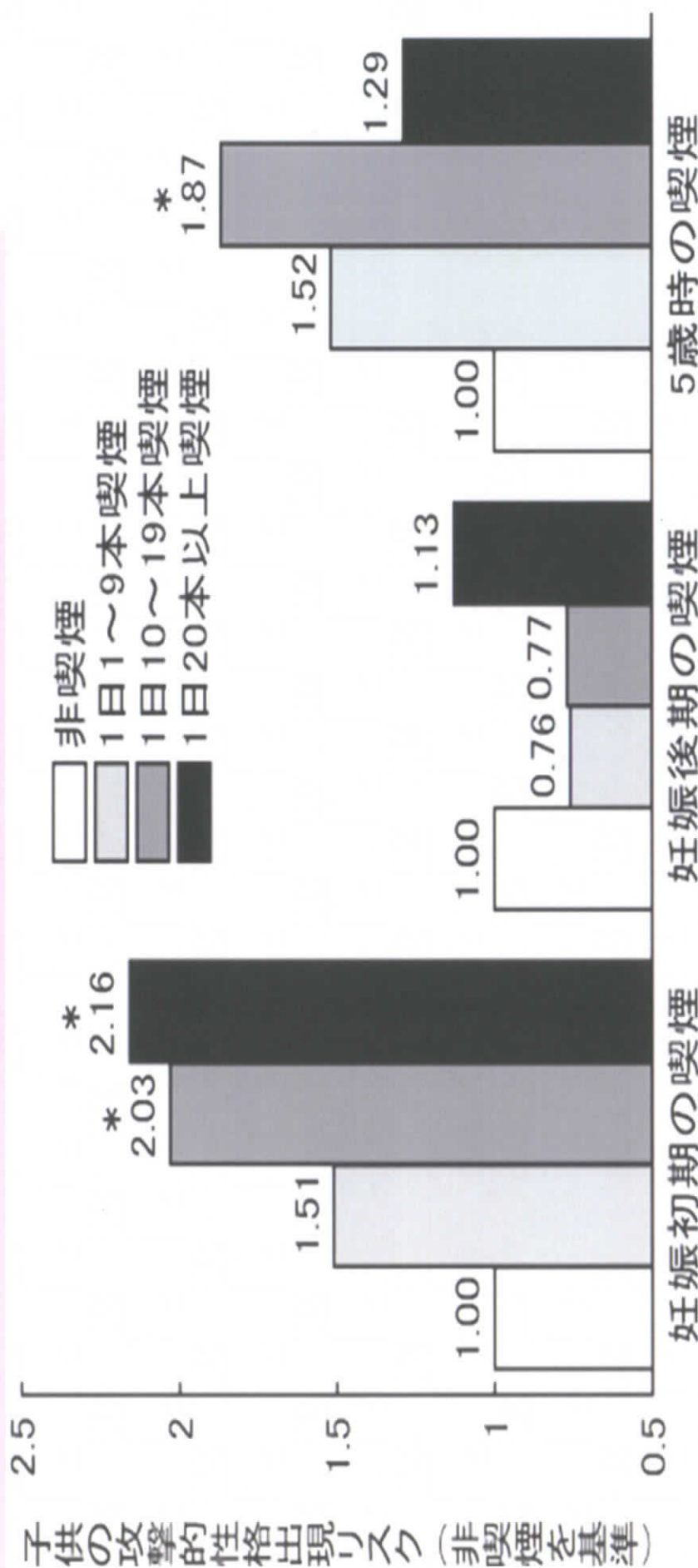
妊娠後期の喫煙

妊婦の喫煙と出生児の11歳時の知的能力、身長 (Butler, 1973を改写)

タバコ病辞典図表コレクションより引用



妊婦の喫煙や幼少期の受動喫煙で子どもの  
注意欠陥・多動性障害(ADHD)の症状の他  
者への攻撃的性格リスクが高くなります。



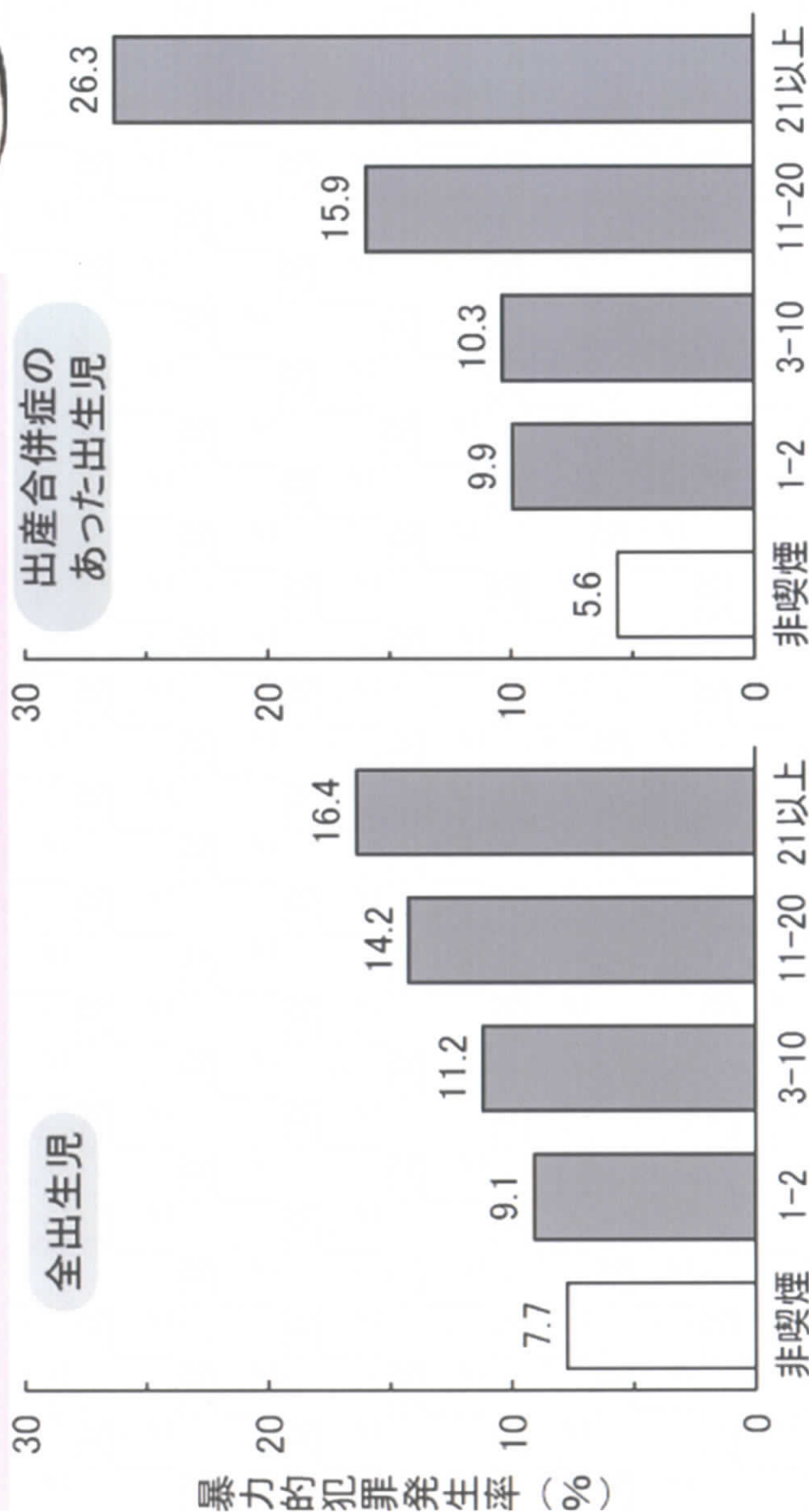
母の喫煙状況

母の喫煙と子のADHD (Williams, 1998)

(\*は有意差あり)

タバコ病辞典図表コレクションより引用

# 妊婦が喫煙すると成長後の暴力犯罪率 が高くなります。



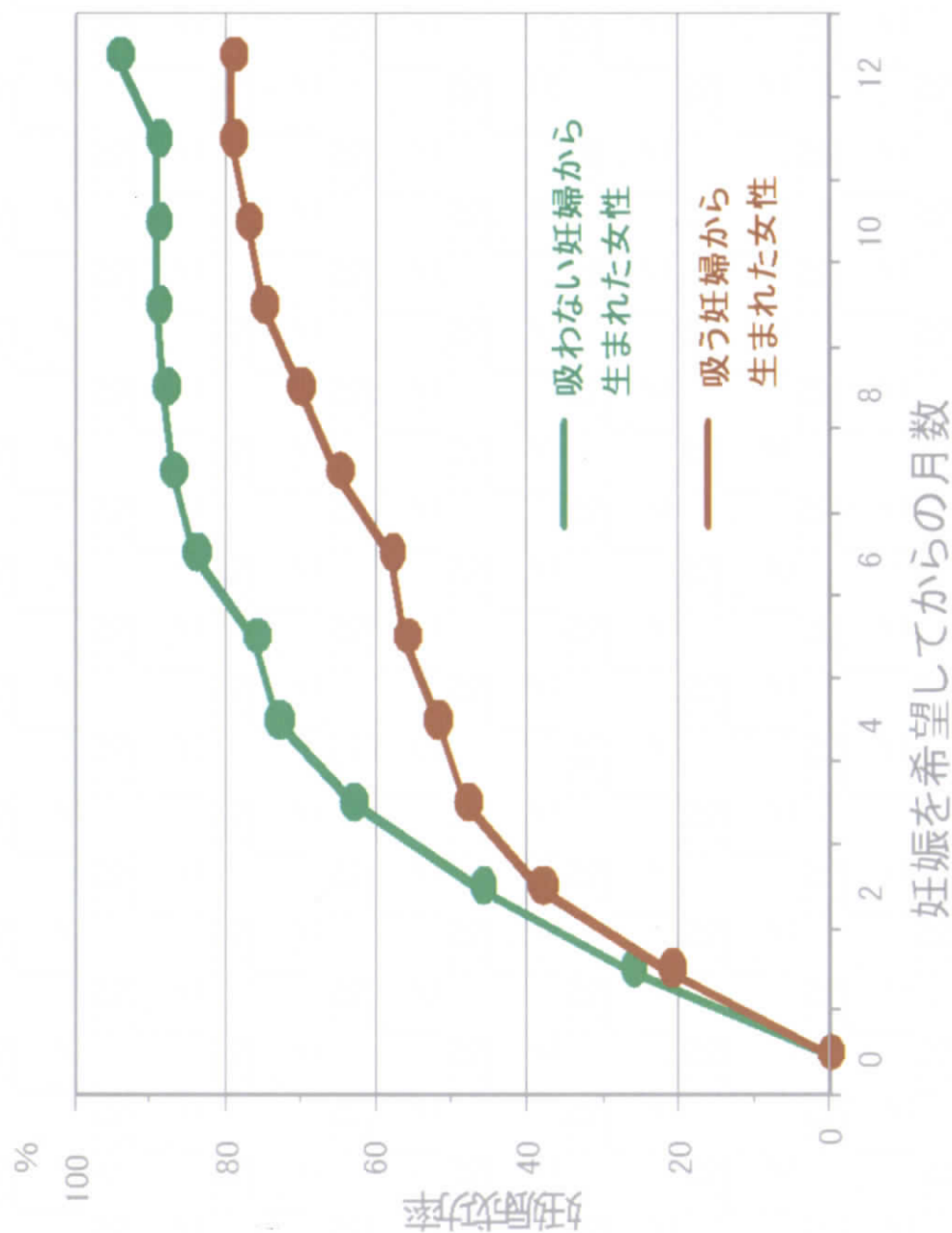
妊婦の喫煙と出生児の暴力的犯罪 (Brennan, 1999)

タバコ病辞典図表コレクションより引用

妊婦が喫煙すると女児の妊娠成功率が下がります。



## 妊婦の喫煙と女児の将来の妊娠



(C.R. Weinberg et al. Am J Epidemiol 1989;129:1072)